
イケニエとカミサマ

神崎みこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イケニエとカミサマ

【Nコード】

N6167Z

【作者名】

神崎みこ

【あらすじ】

世間知らずだが容姿だけはよい少女は、ある思惑をもってカミサマと自称する男の下へと送られる。ゆるゆるとした時を共に過ごしながら、少女は己の立場と、カミサマのことを知るようになる。誰から必要とされなかった少女と、カミサマとのゆるやかな交流譚。

その一

「起きたか？」

知らない声で、あたしは起きた。

やっぱり、知らないところで、知らない人で。

びっくりするほどキレイなそれは、キレイに笑って、そしてあたしはまた気を失なった。

うつそうと生い茂る木々の中、獣道しか存在しない森の奥には、古びた小さな社が鎮座している。年季の入ったと思われる木材は、ところどころ朽ち、それでも寂れた印象を与えないのは、きちんと手が入っている様子が見受けられるからだろう。

本尊を守るために閉じられた扉の前には、供物を捧げる台が置かれている。米と塩が盛られた小皿が供えられ、その両脇には、朝活けたであろうまだ瑞々しい花が色を添えている。

暗色に支配された空間に、そこだけ灯りがともったようでもあり、その社が今でも人間に忘れられていないことを強烈に訴えかけていた。

そんな、ある意味俗世とはかけ離れた空間に、昨夜一人の少女が置かれ、その姿がなくなっただことを知るものは、その社を守る村民たちのみであった。

朝、社の世話をしに来た村人は、少女がいなくなったことを発見し、安堵した。

彼らの神が、少女を受け取ってくれたのだと。

そして空を見上げ、僅かに覗く青い空を睨みつけた。

神様が、彼らの供物を受け取ったのだから、早晩雨が降るはずである、と。

彼はこの僥倖を伝えるため、来た道に戻っていった。

一人の少女を山奥に放置し、その後どうなるのかを頭の片隅に考えることもなしに。

「いいかげん起きないか？」

少女は幾度目かの声掛けに、ようやくゆるゆると目を開け、おぼつかないながらも半身を起こした。

肩上で綺麗に切りそろえられた黒髪は美しく、彼女の白い肌をよりいっそう際立たせている。一見すると人形のような少女は、だが、口を開けば十中八九の人間が落胆するほどの態度をみせた。

「誰？ あんた」

「人の家に勝手に転がり込んでおいて、よく言う」

「はあ？ っていうか、ここどこ？」

「どこって言われると、困るが」

少女はきよろきよと周囲を見渡し、ここが彼女の知らない場所であることを確認する。

「あたし、友達の上に泊まってたはずなんだけど」

男は彼女を凝視し、そして嘲るような笑顔を浮かべた。

「ふーん、そっか。でもそれ、本当に友達？」

少女は小首をかしげ、彼が言った言葉を反芻する。

確かに彼女は、少女にとってただのクラスメートであり、実家に泊まりに行くほどの仲ではないはずだ。

どういうわけか熱心に少女をさそい、深く考えずにその話にのつてみれば、今現在このような状態となっている。

実は、少女自身もよくわかっていないのだ。

どうして、ただのクラスメートの誘いに乗ったのか。

そして、どうして自分は今こんなところにいるのか。

「君、生贄にされたみたいだねえ」

「イケニエ？」

「そう」

彼女は自分の理解が出来ない話をする男を見上げ、悪態をつく。

「ばっかじゃないの？なにそれ？もうすぐ世紀末だっていうのになに古臭いこと言ってるわけ？」

「時が止まった空間というのは、意外とどこにでもあるものだ」

胡乱な視線を送られ、だがそんなことを鼻にもかけない男はさらりと話題を変える。

「名前は？」

「佐々木礼奈」

それに素直に応えた少女は、何かが自分の中を通り過ぎていく感覚を覚えた。

「……、もうちょっと疑うことを覚えた方がいいと思うけ

ど。まあササキレイナね」

礼奈は精一杯の虚勢をはって彼を睨みつけた。置かれた状況が異常であったため、礼奈自身気がつかないでいたのだが、目の前の男は、さらにそれを上回るほど異常だ。

光沢のある灰色の髪、同じ色をした瞳、陶器の人形にも似た白く滑らかな肌。そのどれをとっても人間離れたものではあるのだが、何より彼の持つ雰囲気の特異だ。

礼奈は頭がよくない少女ではあるが、これぐらい突出た異変を嗅ぎ取れないほど愚かでもない。

「あんた、だれ？」

ようやく、自分以外に意識がむいた礼奈は、今更な質問を口にする。

「僕？ カミサマ」

せせら笑うように男が答える。

常ならば、そのような言葉を吐き出す人間は、よほど愚かか、よほど狂っているかどちらかである。だが、礼奈は、どういうわけか彼の言葉を真実だと感じ取ってしまったている。

そんなはずはない、という心のどこから湧き出る反証すら押さえ込み、礼奈は彼に見入る。

「そんなのでも見られると照れるな、おまえ顔だけはいいいし」

「かお、だけ？」

現実逃避なのか些細な言葉尻にひっかかりを覚え、礼奈が反論する。

「ああ、おまえは器だけのからっぽだ」

「からっぽって」

「反論できるのか？」

妙に威圧感のある彼の言葉に、礼奈は黙る。

「勉強できない、しない、運動嫌い。そして家族にも友達にも嫌われている、だろ？」

どうして、とも、なぜ、とも口に出せずに礼奈はただただ呆然と彼を見据える。

「まあ、だからといってこんな目にあっていいわけじゃないけどね」

男は、徐に礼奈の腕をとる。

真っ白な手首には、赤黒い痕が残っていた。

身に覚えのない礼奈は、混乱した頭のままぼんやりと手首の痕に視線を合わせる。

日常で、こんな痕ができる生活を礼奈は送っていない。

普通に学校に行き、授業を適当に受け、適当に友達と遊ぶ。

そんな毎日を送っていたはずなのだ。

唐突に置かれた今の立場と、日常があまりに乖離している。

頭も気持ちもついていかない。礼奈は、ふと気が遠くなるのを感じた。

「それに、胸小さいなあ」

「やかましい！これから大きくなるわ！」

だが、男の声に一気に現実を引き戻され、彼女はあれほど威圧感を感じていた男に拳を振るっていた。

それを易々と受け流した彼は、にやりと笑う。

「まあ、可能性は低いと言わざるを得ないけど、がんばってみるか？
時間だけはやたらとあるからな」

その彼の言葉の意味を真に理解できたのは、もっとなんと後になつてからのことだった。

その二

あたしはわからなくて、夢の中で必死に助けを求めた。
朝起きて、現実は何も変わっていないことに気がついて、はじめて泣いた。

泣いたままの礼奈を見下ろした灰色の男は、つまらなそうな顔のままどっかりと腰を落とした。

畳敷きの部屋に敷布団、という典型的な古い日本の寝具の上で、礼奈は混乱のあまりただただ泣き続けていた。

響くのは彼女の嗚咽のみ、というこの空間は、八畳ほどの寝具以外は何もない部屋だ。三方が襖で囲まれ、一面だけが障子の扉で閉ざされている。障子からは外からの明りがもれ、すでに日が昇って久しいことを教えてくれている。

「あんた、慰めるとかしないの？」

しゃくりあげながらもようやく泣き止んだ礼奈は、開口一番憎まれ口を叩く。

男は、たいして気にもせずそれに軽口で答える。

「なんで俺が」

「女の子が泣いてたら慰めるのが男の仕事でしょう」

「そうされるだけの価値がある女ならね」

「どういうことよ」

「そのままの意味だが？」

礼奈は、一般的に美人と呼ばれ、異性にはちやほやされることが多い。同性にはその性格から敬遠されていたのだが、それを「妬み」だと決め付け、彼女らを見下していた。当然彼女の周囲には、似たような意識の人間しかおらず、もてはやした男たちもまた、それに釣り合う程度の人間ばかりであった。

見た目だけは華やかな、中身は乏しい人間たちの集団。

礼奈のいたグループはそう目され、遠巻きに見られていたことを彼女は知らない。

だからこそ、こんな風に面と向って彼女を批判した異性は初めてで、心細さと混乱から、口調がさらにとがったものとなっていく。

「あたしの何がわかってんの？」

「少なくともおまえよえりわかっていると思うが？」

目の前の男は、初対面の謎の男だ。

しかも、自称カミサマという世迷言をためらうことなく口にするほどの。

だが、どういうわけかそれら全てを飲み込んで、礼奈は対峙している男が、人間ではない何か、ということを確認つつあった。

「まあ、時間はあるからな。少しは勉強したらどうだ？ そのからっぽの脳みそが少しはましになるんじゃないか？」

「いやよ！ あたしは帰るんだから」

じっと、灰色の男は灰色の瞳で礼奈を見つめる。

その視線に耐えられなくなり、彼女は顔を逸らす。目に付いた畳みの縁は新しく、どういうわけか、森の中で見かけたような気がした、手入れされた古びた社を思い出した。

「どこに？」

優しさのかけらもない男の言葉に、礼奈は再び彼と視線を合わせる。射抜くような視線は、何もかもを見通されているようで、彼女はそれを避けるようにしてうつむいた。

「ようするに、おまえは捨て子みたいなものだろ？」

「違う」

自分の何をわかっているのかもわからない男が、正確に彼女の状況を暴きだす。

いたたまれなくなって思わず掛け布団を握り締める。

「じゃあ、君がいなくなって、誰が君を探すのかを言ってごらん？」

「それは」

うつむいたまま、誰の名前も挙げられない自分に、礼奈は知らずに再び涙をこぼす。

あふれ出る涙は、先ほどのものとは違い、憐憫の気持ちが強く出た涙だ。

そう、彼の言うことは、全てがあたっているのだから。

「いたぶりたいわけではないんだがな」

彼は立ち上がり、そして静かに障子を開け、部屋を出て行った。

残された礼奈は、耐え切れずに布団に突っ伏して声を上げて泣いた。

誰も、助けにはこない。

誰も、探しにはこない。

それを知っていたはずなのに、突きつけられた現実は、もっとずっと冷たいものだった。

礼奈は、普通の家に生まれた一番目の女子だ。

同居していた父方の祖母は、彼女を溺愛し、共働きで働いていた両親に代わって彼女を育てた。いや、どちらかといえば、礼奈を取り上げ、その母親業を実母から取り上げたともいえる。そのせいなのか、礼奈は祖母にはよく懐き、そして実母には壁をつくるような少女へと成長した。

そのまま行けば、ただの三文安の子供、というわけなのだが、皮肉なことに二番目の子供が生まれたことから彼女の生活が一変した。次の子は待望の男児だったからである。

祖母は狂喜し、再び取り上げるべく、あれこれ采配をはじめた。しかし、年月というのは残酷なもので、祖母は老い、そして実母は強くなっていた。

祖母の支配を良しとはしない実母は、産後すぐ息子だけを連れ彼女の実家へと逃げ帰り、そして戻ってはこなかった。あつという間に家族が瓦解した佐々木家では、全く何も言わずに何もしなかった実父でさえ、家を出て、彼の妻、つまり礼奈の母と息子と暮らし始めた。

取り残されたのは老婆と孫娘。

そして、彼女はろくな躰も教育も受けてはいない、典型的なわがままな少女だった。

祖母は、あれほど溺愛していたにもかかわらず、手に入らなかった孫息子を嘆き、手に負えなくなった孫娘を嫌悪した。顔をあわせることもない二人、礼奈の様子さえ気にもならない両親たち。

悪くなっていく素行も、彼らにとっては何だただ迷惑なものでしかなかった。

ひとかけらの心配すら、礼奈には与えられなかったのだ。

泣きつかれ、そのまま寝入ってしまった礼奈は、再び日の明るいうちに目を覚ました。

瞼の腫れをかんじ、せめて洗顔だけでも、と立ち上がり、初めて部屋を出た。

襖を開けた瞬間、ガラス戸の向こうに、こじんまりとした庭園が目に入った。それを見入り、しばし立ちすくむ。

涙が、再び伝ってきたことにも気がつかずに、礼奈は、ただただ立ち尽くしていた。

「ほらよ」

唐突に何かが頭の上に投げかけられ、それが手ぬぐいだと気がついた。

いつのまにか男がすぐ側まで近寄っており、礼奈は見慣れない彼に小さく驚いた。

「顔洗って来い」

黙ったまま頷き、彼の言われるまま、洗面所で顔を洗う。

普通の水道水より冷たいそれは心地よく、礼奈は何かが落ちていくような気がした。

「来ちまったもんは仕方がねえ。多少の面倒はみるが、まあ期待はするな」

ここがどこなのか、どうして自分がいるのか、という根本的な疑問を残したまま、彼と礼奈の同居生活が開始された。

その三

どうしてあたしがここにいるのか、あたしは知らない。
だけど、ここにいていいという男の言葉は、あたしにはとても気持ち良かった。

「っていうか、あんた名前は？」

「あんたって言うな。言葉遣い悪いなあ」

「人のこと言えないじゃん」

本能的な恐怖すら覚えた男の家に、礼奈はあっさりと住み着き、すでに幾日か経過していた。

誰が用意しているのかすらわからない朝食を目の前に、礼奈は唐突に疑問を口にした。

「カミサマでもカミサマでもカミサマでも、どうとでもご自由に」

「自由じゃないじゃん」

「どうせ名前なんてないしな」

香がたつ味噌汁を飲みながら、男が嘯く。

それを嘘だ、とも、からかいだともとらずに、礼奈はただ同じように汁物を口にする。

「おいしい。まあいいや、それで」

あっさりとそう了解し、二人は沈黙のまま質素な朝食を再開する。

礼奈は彼に名を聞かれてから、彼の言葉の真偽を体のどこかで感じ取る、という不思議な感覚を味わっている。

彼の言葉一つ一つが、口に出して聞いただすことをせずとも、真実なのかどうなのかがただわかる。ここに来る前ならば、到底想像することすらできない現象に、すっかりと馴染み、日常生活と同じこととして受け取ってしまっている。

年頃の娘が食べるには、やや少ない量の朝食を食べ終え、箸を置く。

食べ終えた膳の上の惨状に、男が片眉を上げ、叱責の言葉を飛ばす。礼奈はふくれっ面でそれを受け取り、大人しく茶碗の中の体裁を整える。幾度も繰り返されるやりとりに、それでも男は根気よく彼女を叱り付ける。

「で、何すればいいわけ？」

「とりあえず本でも読んどけ？それだけは大量にある」

「めんどくせえ」

「女の子がそういう言葉遣いするのはだめだといっただろ？」

舌をだし、礼奈は食器を片付ける。

初日は汚く食べ散らかしたあげくに、そのままどこかへ行こうとした礼奈だが、カミサマの一言で何かに取り付かれたかのように強制的に食器を片付けさせられたあげく、どういうわけか家中を掃除するはめになったせいなのか、大人しくこの規則にしたがっている。それでも、食べ方だけは上達はみられないが、箸の使いかただけはややましになった。それを褒める人間はここにはいないのだけど。

「退屈う」

一人きりで暮らしてきた彼は、静寂を好み、このどちらかといえばやかましい小娘が空間を乱すことを良とはしていない。

だが、自分に責任がないとは言いい切れないせいなのか、男は同じ部屋に彼女がいることを許容している。

それでもその距離は徐々にではあるが、縮まっていった。

全ての疑問を飲み込み、ただ居心地のよさに身をゆだね、礼奈は男と供にあることを選んだのだから。

ゆるやかに時は流れる。

全く伸びない髪の毛と、成長しない手足。

礼奈は、幾年かたった後、ようやくカミサマに尋ねた。

「そういえば、あたしってどうしてここにきたの？」

「それ、最初に聞くべきじゃないか？」

「最初に話しとくことじゃない？」

縁側に並んで座り、何かが飛び回る庭を二人で眺めるのはこのところの日課だ。

得体の知れない男として一定の距離を保っていた礼奈も、いつしか彼に慣れ、そして生意気な小娘だと思っていた礼奈に、彼も幾ばくかの親近感を覚え始めた頃からの距離感だ。

触れる、わけでもないその距離は、それでも礼奈を安心させるには十分だった。

「イケニエ、って言ったよな？」

「それは聞いた」

クラスメートの実家に誘われ、それが今まで見たことのない山奥の

田舎の村だったため、どういうわけか受諾し、そして礼奈は現在に至っている。

蚊帳をつった畳の部屋で寝たところまでは覚えているのだが、いまだとしてここにいるのかは彼女にはさっぱり記憶がない。

無意識に、縛られていた痕があった手首をさすりながら、彼の顔を見つめる。

灰色の男。

何もかも薄い灰色に彩られた男は、人形のように美しい。

そして、人形のように人間味を全く感じられない。

灰色の瞳が、礼奈を捉え、彼女はその中に自分の姿がうつりこんでいることを知る。

記憶にあるころの自分と全く変わらない自分、が。

「ここが閉鎖的な村だっていうのはわかるよな？」

「よく、わからないけど、私が遊びに行った日に、随分色々な人にじろじろ見られた覚えはあるけど」

同級生に連れられて、あの村に足を踏み入れたときの感覚は、一言で言うならば不快なものであった。

ちらちらと覗き込むくせに、声を掛けるわけでもない。さらにこちらが見返せば、突然家の中に隠れてしまう、といった扱いはどう考えても気持ちのよいものではない。

さらには、気がつけば視線を感じ、挨拶一つしない後姿を見送ってばかりなのは、鈍感な礼奈にしたところで滅入るものだろう。

「で、水不足だったんだな」

「そうだったけ？」

「礼奈が住んでたところはまあ関係ないがなあ」

水不足、と聞いたところで、礼奈に全く実感がこもらないのも無理

はない。彼女の住む街は、非常に豊富な水源を持ち、また川からの取水が減少しようとも、いくらでも地下から水が湧いてくることで有名だからだ。周辺の市町村が濁水に喘いでるなか、彼女の街だけは体育の授業で水泳の時間を減らさなかったのだから、どれほど水不足と縁遠かったかがわかるだろう。

「どういうわけか昔から使ってた地下水が枯れたみたいでね、運の悪いことに」

村の人口は少ない。だから日々を暮らせるだけの水量を確保することとは出来ないことはない。だが、さらに農業だの畜産だのとなれば話は別だ。

追い詰められた村人たちは、どういうわけか昔ながらの方法に縋ろうとしていた。

つまりは、村を守る鎮守さまへ生贄を捧げよう、と。

「ばかじゃない？」

「ばかなんだよなあ」

冷静に考えれば、そのような非現実的な事をして無駄だ。市町村レベルで援助を請う方が先だろう。

だが、閉鎖的な村において、狭い考え方をする彼ら彼女らは、最も安易で愚かな方法をとってしまった。

それを、愚鈍である、と切って捨てるのは簡単である。

だが、彼らの中には彼らの中で息づいた法則があり、規則がある。因習、とも呼べるそれらは、彼らを容易に縛り、身動きをとれなくさせる。

誰が言い出したかもわからないそれに、あつという間に群がり、村はそちらの方向へなだれ込んでしまった。

幾ばくかの後ろめたさが、彼らに誰にも探されない少女を求めさせ、

それに合致したのがたまたま礼奈だったのだ。

「それであんだけ熱心だったんだ」

同級生からもやや浮いていた自分を誘った理由を理解した礼奈は、僅かに肩を落とした。

家の中にも居場所がない彼女にとって、その誘いはかすかな明りを照らすようなものだったのだから。

「で、雨降ったの？」

「いつかは降ったんじゃない？ たぶん」

「カミサマじゃないの？」

「そんな大層な力もってねーよ。もってたらこんなとこいねーって」

それは、確かにその通りである、と、礼奈は周囲を見渡す。

閑寂な、と言えば聞こえはよいが、何もない木々の中に取り残されたかのようにたたずむ日本家屋、わずかばかりの庭。それだけが礼奈のいる空間だ。

気まぐれに森の中を歩くものの、そこには稀に動物たちが紛れ込むぐらいで、何か楽しいものがあるわけではない。こういうシステムになっているのかはわからないが、人ならぬものが現れ、新鮮な食材や男が求める本などを置いていく。

彼によると、ここは色々な道が交雑する場だというが、礼奈はよく理解してはいない。

「まあいいや」

「いいのかよ」

「生活が変わるわけじゃないからねー」

そう言って礼奈は男に自らの背中を寄せ、初めてその体重をかけた。

わずかばかり寄った眉根も、それ以上不快を表すことはなく、二人は日が暮れるまでただじっとそこにいた。

その四

ここは交差する「場」だから。

男が言ったことを、あたしが理解できているわけじゃない。

だけど、留まったのはあたし一人だ、ということだけはわかることができた。

それがちよつとだけ嬉しくて。

誰かの特別になったような気がしていたんだ。

「ん？ 迷子」

人ならぬものの気配で満ちている屋敷の中で、それ以外の、つまりは人を見かけることが初めてだった礼奈は思わず声をあげた。

声に気がついたのか、男児は足を止め、周囲を見渡し突如大声で泣き始めた。

子供の世話などしたことがない礼奈は、ただおろおろとするばかりで、大きな音が苦手な何かたちはただひっそりと遠巻きに子と礼奈を見守っていた。

「うるせーなー」

のっそりと男がやってきて、男の子を片手で抱き上げそして森の方へと歩き去ってしまった。

ただぽかんとそれを見送ることになった礼奈は、男の子が立ちすくんでいた場所と、彼らの行く先を交互にみやる。

ほどなくして帰ってきた男は、少年を連れてはいなかった。

「どこにやったの？」

「返したんだよ」

「返した？」

面倒くさそうに答える男は、それでも礼奈の問いを無視することはない。うるさいやつだ、という表情を隠そうともせず、それでも相手を務めている。

「たまにいるんだよ。ああやって迷いこむやつが」

礼奈は、ここにどうやってやってきたのかを覚えてはいない。気がつけばここにいて、住み着いている。

なおも疑問の表情を浮かべる礼奈に、男は続ける。

「子供が多いんだがな、この空間に落ちるやつがまれにいる。大抵は俺が気がついてとっとと元の世界に返すんだがな」

「元の、世界」

「ああ」

どれほど未練がない、と言い切ろうが感傷が浮かびあがるのは致し方がないことだろう。彼女を取り巻く環境全てが、彼女にとって苛酷であったというわけではないのだから。

「帰りたいのか？」

ふいに落とされる優しげな声音に、礼奈は慌てて首を振る。ここにいたい、と思う気持ちは事実だからだ。

「まあ、おまえはまだ出れない、がな」

ただうなずき、男の後に続いて縁側に腰掛ける。

拳一つ分ほど開けた距離が、男と礼奈の心理的距離である。

稀に起す、礼奈の甘えた素振りを拒絶する男ではないものの、いつも素直にそれを現すほど、礼奈は彼に心を許してはいない。

ただ、二人の間に流れる空気は随分と穏やかなものになったことを、彼女はまだ気がついていなかった。

初めて男の子を見つけて以来、礼奈は、稀に通り過ぎる人間へは声を掛けずにただ見過ごすように心がけていた。

大抵は気がつかずに庭を通り過ぎてゆき、そしてどこかへとまた帰っていく。

それは交差した道の中から、正しい道へと進む過程であり、男もそれに手を加えることはない。

ひどく迷子になってしまった場合のみ、男は重い腰を上げて手を貸すものの、そういう事態は頻繁に起こるわけではない。

「あの人たち、ちゃんと帰れるの？」

「まあ、大抵は」

「帰れなかったら？」

「どこか他の場に行くこともあれば、時間軸がひどく狂うこともあるようだ。所謂神隠しってやつだな」

「そう」

ただ通り過ぎていく人間たちに過度な同情心など生まれるわけもない礼奈は、男の淡々とした説明をただ耳にしていた。

「おはよう」

庭におぼろげな姿を現したそれに、礼奈は挨拶を投げかけた。

ゆらり、と姿がゆれ、小さく会釈をしたようにみえた。

それに礼奈は笑みで返し、盆の上に置かれた湯飲みを手にした。

ここに現れる人ならぬものはひどく臆病である。騒いでさんざんそれらに脅えられてしまった彼女は、慣れるにつれこのような態度と距離感を会得した。

日常に埋没してしまえば、それらに怖いと思うことはない。

静かな一日が始まろうとしたところで、それは唐突に破られた。

「あれえ？ここどこ？」

鮮やかなワンピースを着た女が、忽然と庭に現れ、驚いたような声を発した。

途端、それらは姿を消し、縁側に座った礼奈だけが取り残された。女は礼奈の姿を認めると、ほっとしたような顔をして、近寄ってきた。

久しぶりにみる人間に、礼奈は戸惑い、そして困惑していた。

この場が混線し、こうやって人が現れることはあることだ。だが、このような妙齡の女性が落ちてきたのは初めてだからだ。まして、礼奈は返す方法を知らない。

曖昧に笑顔を作ったところ、女は滝のように勢いよく話し始めた。耳にきついその声を、ああ、私はこんな風にあの男に思われていたのだな、とぼんやりと思いながら聞き流していく。

綺麗に色が塗られた爪、明るい色に染めた髪、そして礼奈が記憶していたものとは異なる趣の衣服を眺めながら。

ようやく、女が落ち着いた頃に、男はのっそりと彼女たちの間に現

れた。

「あ・・・・・・・・」

そう言ったまま押し黙った女は、明らかに男に見惚れている様子だ。確かに男は、一度見たら忘れられないほどの美貌を持っている。灰色の髪も灰色の目も、浮世離れした彼の美しさを際立たせている。だが、そんなものはただの表層にしか過ぎない。

頬を染め、先ほどまでの勢いはどこかへいったような女を見つめる。この男の、何かを感じ取ることはできないのかと。

「お嬢さん、送りますよ」

男は、礼奈にはあまり見せることのない笑顔で、女の背中に手を当て促す。

自然顰めてしまった顔に気がつくことはなく、礼奈はただ二人の後姿を見送った。

機嫌が急降下した礼奈は、程よく沸かされた風呂に乱暴に身を沈めた。

彼女にとっては少しぬるめの湯が全身に行き渡る感触を楽しむ。

息を吐き、軽く両腕を伸ばし、ゆったりと肩まで湯に沈める。

徐々に落ち着いた頭では、どうしてあれほど感情を乱してしまったかを考えていた。

ある日突然迷い込んだ場所で出会った正体の知れない男。

それ以上でも以下でもない存在。

だが、自分にはない柔らかな曲線を持つ女に、殊更甘やかな顔をする男を見ていることができなかった。

それを第三者に問えば、嫉妬だと明瞭な答えが返ってくるのだろう。生憎と、その問いに答えるものはここにはいない。

迷路に迷い込んだ思考のおかげで、随分と長湯をした礼奈は、すっ

かりのぼせた体に浴衣をだらりと羽織り、引きずるようにして風通しのよい部屋へと歩いていった。

男は、当たり前のように縁側に座し、いつものように書物に目を落としていた。

人ならぬものは庭先で駆け、まるで先ほどの出来事がなかったかのようだ。

「いたの」

僅かに書物から顔をあげ、立ちすくんだままの礼奈に視線を寄こす。男はあからさまに顔を顰め、乱暴に書物を閉じる。

「おまえな、その格好はなんとかならんのか」

羽織っただけの浴衣はその役目を果たしておらず、袂からは礼奈の白い体がすっかりと覗いている。

慌てて袷を掴み、体を隠す。

「おまえ、誘ってんのか？」

「ばかじゃないの」

「まあ、おまえのそれじゃあなあ」

初めてかけられた性的なからかいに慌てふためく礼奈をよそに、男は余裕の表情をみせる。

「どうせ小さいわよ」

初対面で男がした失言をしつこく覚えていたのか、礼奈が勢いよくくっつく。

年頃の娘、と言うには年月がたっているが、意識の上ではまだそう

だと自認している礼奈は、やはりそういうことが大層気に掛かる。

「あれほどとは言わないがなあ」

男が、明らかに先ほどの女の肢体を思い出すかのような軽口をたたき、さらに礼奈を挑発していく。

膝を詰めるかのように男のそばまで近寄った礼奈は、男の胸倉をつかみ小言を続ける。

それをうるさそうにするでもなく、男はただにやついた笑みを浮かべている。

「あのな、おまえいいかげんにしろよ、その格好」

手で押さえていた衿は、彼女が手を離せば用意にはだけ、あっさりと礼奈の裸をむき出しにする。

慌ててそれをおさえ、なおも睨みつける彼女の頭上に、ふいに男の右手が降りてきた。

優しく幼子をあやすかのような仕草に、礼奈は虚を突かれたような顔をした。

いてもいい、とその存在を認められてはいた礼奈だが、男に優しくされたことも優しい言葉をかけられたこともない。僅かな接触を許されるのみだった彼女は、だが、それだけでも十分なほど満足していた。

邪険にされない、ただそれだけのことがどれほど嬉しいことを礼奈は知っていたから。

「なんで泣いてんだよ」

知らずに流れ落ちた涙は、新しい彼女の浴衣を濡らしていく。

男が、礼奈を抱き寄せる。

男の体温を感じた礼奈は、さらに静かに泣き続ける。

「礼奈」

甘やかに自分を呼ぶ声に、礼奈は顔を上げる。

男は、乱暴に礼奈の頬を拭う。

礼奈は、初めてもっとこの男の近くにいたい。そう思った。

その五

あの男の体温は嫌いじゃない。

ここにいていいって、思わせてくれるから。

好きだとか嫌いだとか。

そんなことはわからない。

ただ、必要とされるのがこんなに嬉しいだなんて知らなかった。

礼奈が数えることをやめたほど季節が過ぎていったころ、男と彼女の距離はいつのまにかひどく縮まっていた。

甘やかで濃密な空気が支配する中、礼奈は蚊帳の中でしどけない姿をさらしていた。

ここでの生活は基本的に古典的衣装が多い。

どこから差し入れされるのか、礼奈によく似合うそれは、大人びた袖であったり、艶やかな振袖であったり。まるで季節も用途もばらばらなそれを、人でないものに着付けられ、いつしか礼奈も受け入れていた。

当然寝所では浴衣であり、昨夜は紺地にアジサイの白い花が散ったものを纏っていたはずだ。

それはすでにどこかへと追いやられ、礼奈は掛け布団でその白い肌を隠す状態となっている。

隣には灰色の男。

不気味で正体もわからなくて、名前さえ知らぬ男。

二人きりの生活は退屈なようにみえて飽きることはなく、男の蔵書と時折運ばれる外界の情報、そしてなにより博識な男と会話をする

ことで日々を満足に過ごしていた。

「礼奈は帰りたくないの？」

いつしか呼び名さえ変化しており、二人の心理的距離も近いものとなっていた。

「ない」

「即答だねえ」

「居場所なんてないから」

時折思い出さないこともない家族は、自分を快く迎えることはないだろう。いや、ともすれば突然帰ってきた娘に困惑さえするだろう。礼奈はその時の情景をありありと思い浮かべることができ、ややうんざりとした表情を浮かべる。

男は頭を振った礼奈の首筋を撫で、そして自らの胸へ引き込んだ。お互いの体温が交じり合っていく。

礼奈は全てを委ね、そしていつしか眠りへと落ちていった。

きやらきやらと笑い声を上げ、子鬼たちが庭を駆け回る。

その姿を見ながら、礼奈は男と二人スイカにかぶりついていた。

新しい浴衣を身につけ、うちわを縁側に置く。盛夏にふさわしい衣装と果物に、礼奈は満足していた。

「あのさ」

「何？」

男の口端についた果汁をぬぐいながら礼奈が尋ねる。
知らぬことはない、と思わせるほど知識が広い男は、こうして彼女の問いに答えることが多い。

「なんか、あの辺おかしくない？」

礼奈が指差す方向は、木々に埋もれた空間だ。

コケが生え、日差しは生い茂った木々に遮断されたそこは、ひっそりとして人々を寄せ付けぬ雰囲気をもし出していた。

その空間が、どこかおかしいと気がついたのは最近のことだ。

先の景色がゆらゆらと歪み、時折、先を見通せぬほど木々が折り曲がって見えるときがある。体一つ分ほど隣の景色を見渡せば、そこにはやはり木々が地面から正しく生えており、そこだけが何か異変を生じているようだ。

礼奈は何度も見返し、目をこすり、不思議に思っようやく男へと疑問を口にした。

「ああ、ほころびだな」

「ほころび？」

「ここの空間は信心だけでもってる」

「信心？あの社のこと？」

「まあ、あれだけじゃないが。そういうことだな」

「世話してくれる人がいなくなった？とか？」

「だろうなあ。いや、よく持った方じゃねーか？さすがの田舎でもああいったもんは廃れていくもんだろう」

「ほころび続けたらどうなるの？」

「さあ」

「さあ？」

「わからん。俺はよそのカミサンのことは知らないし。この空間がなくなっちまうのかどうなのか」

しゃくり、とスイカをかみ締め、まだ冷たい果肉の感触を確かめる。

「あのさ、そうしたら、あたしたちどうなるの？」

「消えるんじゃない？」

その声にはかけらの寂しさも感じさせず、淡々としたものだ。

礼奈はその言葉に多少の驚きは示したものの、慌てることなくただ男の隣でスイカを食べて続けている。

「一緒に？」

「ああ」

「だったらいいや」

礼奈は再び男の顔を拭い、自分の口元も丁寧にふき取る。

遊びつかれた子鬼たちは、笑顔のまま一人、また一人と別の場へと消えていった。

「まだ、先のことだからな」

男の背中に自らの背中を預け、礼奈は頷く。

ぎらぎらと照りつけていた太陽もいつしか沈みかけ、屋敷は再び夜の世界に支配されていた。

その六

いつまでたっても変わらない生活。

変わらないあたし。

でも時々何かを思い出すのは、まだ私が「にんげん」だからだろうか。

幾度季節をむかえ、送っていったかもわからなくなったころ、礼奈はふいに懐かしさを覚えた。

それは人ならぬものが届けてくれた、とうきびの甘さに驚いたせいなのかもしれない。

「ねえ、あたし外出れるの？」

全く変化のない容姿も、重ねた年月のせいなのか、どこか艶を帯びたかのような礼奈は、唐突に男に尋ねた。

二人の物理的・心理的距離は縮まり、今では体のどこかが触れるほどにすることが普通だ。

男は、礼奈を激しく求めているわけではないと自嘲しながらも、隣に彼女がいない日を想像できないほどに彼女に依存しはじめていた。

「出られる、と思う。もう礼奈は眷属だから」

「ケンゾク？」

「後で辞書でもひけ」

そういうところは全く甘くなっていない男は、ぴしゃりと礼奈を退ける。だが、彼女に膝枕をされながらでは全くその威厳は感じられ

ない

「まあいいや、で、出られるのね？」

「出たいのか？」

跳ねるように上半身を起こし、男は問う。

すでに慣れてしまった不可思議な両目に見つめられ、礼奈は顔を背ける。

「や、あんなのでもやっぱり家族ってどうなったのかなあって」

男の説明では、閉じられた空間の中にいる自分たちだけが時を止めているだけで、それ以外のものは普通に年月が過ぎ去っているらしい。礼奈が見たところでも、庭園の木々は新緑から枯葉まで、その季節を彼女に教えてくれている。

だからこそ、ふいに気になったのだ。

彼女がいない彼女の家族が、どうなってしまったのかを。それは男からもたらされる安定感ゆえの、心の隙なのかもしれない。

「心配はしていないと思うんだけど」

その呟きに、男は折れ、礼奈はここに来て初めて外界へ赴くこととなった。

涼やかな絹の着物を纏い、礼奈は久しぶりに外を歩いていた。

艶やかな黒髪は男によって器用に結い上げられ、小ぶりのトンボ玉のかんざしが華を添えている。

「いっ、どこ？」

店先に飾られたカレンダーから、二十年以上の時がたったことを確認したときには、軽くめまいを覚えた彼女だが、それ以上に街の変化に戸惑っていた。

在るべきはずの場所に家がなく、ないはずの場所にビルが立ち並んでいたからだ。

特に駅前などは、ローカル路線独特の鄙びたところを感じさせていた駅舎が、いつのまにか複合施設を併設する近代的な建物になっていたことには、心底驚かされた。そこから連なる道々も舗装され、なじみの店は消え、遊興施設やコンビニエンスストアというものになっていった。

「家、わかんないよー」

渡されたお小遣いを握り締めながら、決死の思いで入店したコーヒーショップでは、注文の仕方がわからず、前の人間の真似をして事なきを得た。

ようやく手に入れたコーヒーらしいものを片手に、彼女はゆっくりと座り心地の悪いおしゃれな椅子へと腰掛けた。

この店はガラス越しに駅前の道路を見渡すことができ、礼奈はたいしておいしいとも思えない飲み物を口にしながら、人々を観察していた。

異様に短いスカートをはいている女子高生と思わしき集団に、昔から変わらないスーツを着たサラリーマン。

一つ一つを確認するように、流れていく人を眺めていく。

その光景がどこか遠くの出来事のように、礼奈は懐かしさすら感じ取れずにいた。

開きすぎた時間は、すでに礼奈をこの土地から切り離してしまった

のだと。

そこへ、不意に声がかかった。

中年にさしかかった女が、妖しい目で見下ろしていた。

「何か？」

「あなた、佐々木さん？」

久しぶりに呼ばれた苗字に、礼奈はしばし反応が遅れた。今では彼女をその名で呼ぶものはおらず、男に礼奈と甘い声で呼ばれるだけだったからだ。

「あの」

「……ごめんなさい。知り合いに似ていたものだから。でも、ううん、ごめんなさい」

一人で勝手に納得していった女は、礼奈の顔を不躰なほど見つめている。

自分を見ているようで、別の誰かを探すような表情をしている女を、礼奈もじっと見上げていた。

目尻の皺、肉付きのよい下半身、そして白髪が出始めた頭髪。そんな人間を知るはずもなく、だがどこかで何かがひっかかっていた。

「佐々木礼奈ですけど、あなたは？」

試すように名乗った礼奈に、女は一瞬息を飲み、そして悲鳴をあげた。

幾人かはいた客が、一斉に女をみる。

視線が集まったことなど気がついていないのか、女はおびえた表情をみせ、その場にへたりこんだ。

礼奈は女を見下ろし、ようやく気がついた。

「ああ、あなた」

いくら年月がたち、記憶が色あせたとしても忘れるわけではない。

「あの後、雨は降った？」

「そんな、そんなわけ！」

尻餅をついた格好で後ずさりをしながら、女が叫ぶ。

店員は、女が落とした飲み物を片付けるべく、掃除具をもったまま遠巻きにしている。

「今でもやってるの？そのイケニエとやら」

口角をあげた上げ、うつすらと化粧をされた礼奈の顔が笑顔を作る。今ではめったにお目にかからない和装と相まって、どこか異次元めいた空間を作り出している。

「いや、違う」

それだけを言い残し、這い蹲るようにして女は店を逃げ出していた。

ようやく近寄ってきた店員に会釈をし、礼奈も店をあとにした。

「ただいま」

「おかえり」

家の奥から馴染んだ声が聞こえ、礼奈はようやく息を深く吐き出した。

甚平を着込み、首からタオルをぶらさげた灰色の男は、縁側から下駄をはいた足を投げ出し座っていた。

夕闇が包み込む少し前の、淡い橙色の日が庭先に注ぎ込む。

「どうだった？」

「んー、たどり着けなかった」

小さく舌をだし、土産に携えた冷菓を差し出す。

当たり前のように男の隣に座り、礼奈も行儀悪く縁側から庭へ足を投げ出す。

「また、いくのか？」

「ううん、いかない」

「止めてる、わけじゃないぞ」

「もういい」

「そっか」

そのまま黙った男の膝に頭を乗せ、礼奈は仰向けになって男を見上げる。

はじめは不気味に思った灰色の目が、礼奈を捉える。

「あたし、ここにいていい？」

「………あたりまえだろ」

礼奈は起き上がり、男に口付ける。

「ごはんは？」

「ああ、用意できてる」

暗闇があたりを支配し、そして包み込む。
差し込む光は月明かりのみ。
賑やかな男と女の声が聞こえる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6167z/>

イケニエとカミサマ

2011年12月28日14時53分発行